

〈学術論文〉

上條茂の児童研究論 —国民学校期の教育実践研究における役割に着目して—

篠崎正典 信州大学学術研究院教育学系

キーワード：上條茂，児童研究，長野県師範学校男子部附属国民学校，国民学校叢書

1. はじめに

本稿の目的は、上條茂（1895-1954）の児童研究論の性格について、国民学校期の長野県師範学校男子部附属小学校（以下、長野男子附小）が取り組んだ教育実践研究に果たした役割の分析を通して明らかにすることである。

終戦後、文部省教科書局（以下、教科書局）は、「技術的性格—科学的に裏づけられた実践性」¹を持って新教育を実施するために実験学校を指定した。実験学校では、新教科社会科の実施をめぐる様々な模索が行われた。この実験学校において重要な役割を果たしたのが長野男子附小である。長野男子附小は、1946年5月に1946年度実験学校に指定されて公民教育の研究に取り組む²。その後、1946年12月にも、1947年度実験学校に指定され、社会科の実践的研究に取り組んでいる³。こうした中で行った社会科の実践研究について、長野男子附小は、「学習指導の基盤としての児童の学習能力の実態を把握することに過去十年来（国民学校発足当時より）の努力が傾けられ、終戦後社会科が新たに設けられるや、児童の社会意識の発達や、歴史的・地理的・道徳的諸能力の発達の基礎的な調査に研究が集中されてきた」⁴とし、国民学校期からの児童の実態調査の経験を踏まえて社会科の諸調査に取り組んだことに言及している。とりわけ、1947年7月に発行した『社会科指導の研究』（以下、第一次案）の作成においては、次のように述べている⁵。

「青木先生とその他の諸先生の御指導の下に昭和十六年度来蓄積された児童の研究及びその他の諸調査を整理し、昨年より準備された社会科の基礎調査に基づき、文部省の指示によりどころを得て、わが校の社会科の計画を立てた」（下線は筆者）

ここで言う「昭和十六年度来蓄積された児童の研究及びその他の諸調査」が、国民学校期に取り組んだ児童研究である。これについて先行研究では、国民学校期の諸調査が上條を中心に行われたこととそれらの調査結果が第一次案の作成に用いられたことは指摘しているが、諸調査の背景については検討しておらず、研究課題として残っている⁶。したがって、「国民学校期の児童の研究及びその他の諸調査」の背景について検討することは、社会科学習指導の基盤を明らかにする上での重要な基礎作業として位置付けることができる。

そこで着目するのが、長野男子附小の国民学校期の取り組みの中心となり、「教育の科学的研究の先鞭をつけた」⁷と評価されている上條の児童研究論である。いわゆる児童研究と

は、19世紀末から20世紀初頭にかけてのアメリカで起った児童研究運動（Child Study Movement）に端を発し⁸、日本には、東京帝国大学心理学教室の元良勇次郎（1858-1912）らによって導入されたとされる⁹。大正期の長野県でも児童研究会が開催され、県内で児童研究が推進されている¹⁰。上條もこうした県内の状況下で、長野師範学校を卒業して訓導となり、児童の実態調査に基づく教育実践に取り組んでいるが、その取り組みの中で注目すべきが長野男子附小の首席訓導であった国民学校期である¹¹。長野男子附小の児童研究の背景を明らかにしようとする場合、上記の長野県における児童研究の導入と展開を検討することは必要不可欠であるが、本稿では、その基礎的研究として上條の児童研究論について国民学校期の取り組みとの関わりに着目して検討する。

上條が長野男子附小で関わった教育実践研究における重要な研究成果が、全11巻からなる国民学校叢書の編纂である。国民学校叢書は、1941年以降、上條を中心に青木誠四郎（1894-1956）¹²をはじめとする研究者の指導を受けて取り組んだ国民学校期の教科研究の成果である。国民学校叢書の特徴は、各教科の指導において必要な児童の発達についての調査研究を行い、その調査結果を踏まえて教育内容と指導方法を提示しているところにある¹³。これは、国民学校期の取り組みでありながら、児童の実態の即した科学的な教育実践研究であったため、戦後教育改革の中で民間情報教育局（Civil Information and Education Section, 以下CIE）から評価されたとされている¹⁴。

上條の児童研究については、上條の人物研究と国民学校期の長野男子附小の教育実践研究の立場から考察されている。前者については、教育実践史の視点から上條の教育実践研究の展開の整理¹⁵と、上條の実践的教育研究における児童研究の位置付け¹⁶が言及されている。その中では、上條には児童研究の蓄積があること、国民学校期における教科の実践研究の中心として関わったことは指摘されているが、具体的な役割は検討されていない。後者については、国民学校制度のねらいの具体化の分析¹⁷、各教科の実践の分析¹⁸がされている。また、当時の訓導のライフヒストリーにおいて国民学校期でありながら「中身は全くリベラルであった」¹⁹ことが指摘されている。しかしながら、これらの研究では、上條が中心となって児童研究を重視したこと、各実践の内容は紹介されているが、その背景にある上條の児童研究との関わりからの考察はなされていない。そのため、具体的な児童研究の内容とそれが長野男子附小の教育実践に果たした役割については明確でない。

以上を踏まえ、本稿では次の手続きをとる。まず、上條の教育実践研究における児童研究の位置付けと展開について、彼の経歴を踏まえて整理する。次に、上條が長野男子附小への着任以前に取り組んだ児童研究の内容と方法を明らかにする。その上で、国民学校期の長野男子附小の教育実践研究に上條の児童研究が果たした役割を明らかにしたい。

2. 教育実践研究の展開と児童研究

2.1 教育実践研究の経緯

上條は、1914（大正3）年3月26日に長野県師範学校本科第一部を卒業し、諏訪郡中

州尋常高等小学校に赴任する。中州尋常高等小学校での研究が評価され、1921（大正 10）年 3 月 31 日から、長野県松本女子師範学校附属小学校（以下、長野女子附小）の訓導となる。長野女子附小には、1926（昭和元）年 12 月 30 日まで勤め、その間、上條家に婿養子に入り、川上から上條姓となる。1926 年 12 月 31 日からは、長野市後町尋常高等小学校で 3 年、1930（昭和 5）年 3 月 31 日から北安曇郡池田尋常高等小学校での訓導と北安曇郡平尋常高等小学校での校長を勤め、1936（昭和 11）年 3 月 31 日から長野県視学（学務部学務課）を経て、1939（昭和 14）年 3 月 31 日から長野男子附小の首席訓導となる。その後、1944（昭和 19）年 3 月 31 日から北安曇郡大町国民学校長、1945（昭和 20）年 12 月 26 日から地方視学官（長野県内政部学務課）、1946（昭和 21）年 4 月 1 日から長野県視学官（教育民生部学務課）を経て、1948（昭和 23）年 2 月 4 日から 1952（昭和 27）年 3 月 31 日の退職まで東筑摩郡本郷小学校長として児童の基礎学力の研究に取り組む²⁰。

以上のような経歴の中で上條が取り組んだ研究は表 1 にまとめることができる。表 1 から確認できることは、次の 2 点である。1 点目は、児童研究に基づく教科指導のあり方についての論考を中心に執筆していることである。具体的には、算数に関わる論考 5 本（No.1, 4, 11, 16, 25）、国語に関わる論考 9 本（No.5, 6, 7, 8, 9, 10, 13, 17, 23）、理科に関わる論考 2 本（No.2, 3）、修身に関わる論考 4 本（14, 18, 19, 21）がある。これらは、算数は「数概念」、国語は「語彙」、理科は「疑問」、修身は「道徳性」のような子どもの実態を明らかにし、その内容を踏まえた教授法について言及している。

2 点目は、1 点目に示した論考は、1941（昭和 16）年度までの時期に発表していることである。1941 年度以降の論考を見ると、「国民学校令の実施に当たりて」（No.26）、「決戦下の国民教育」（No.29）、「戦時教育令公布せらる」（No.30）のような国民学校令への対応や「教科外修練の実際」（No.27）のような具体的な国民学校令に基づく教育実践への言及がある。そのため、教科教授と児童研究に関わる論考は、1941 年 2 月の「児童計算能力の一考察」（No.25）を最後に発表しておらず、1950（昭和 25）年 10 月に、それまでの研究を総括した『児童に関する基礎調査』（No.35）を発行している。

以上の研究動向は、上條の教育実践研究の中心に児童研究があることを意味する。これについて、上條は、『児童に関する基礎調査』の「はしがき」に次のことを書いている²¹。

「新教育においては、何よりも先ず個性の価値と尊厳が重んじられ、人格の完成を旨として、人間性を開発し、平和的な国家社会の形成者として、立派な能力を身につけた国民の育成を期している。かく個性を重んじ、人間性の開発を旨とす新教育においては、児童の能力欲求に応じ、その実際生活に即して、教育が展開せらねばならないので、児童の心身の発達状況、並びに生活の実態について、十分これを明らかにし、児童の生活環境について詳細にこれを把握することは、最も必要なこととなる。そのためか、新制度実施以来児童並びに社会の実態調査の関心が高まり、実施の機運に向って来たことは、喜ばしいことである。」

これは、戦後新教育の中で、全国各地で児童の実態調査の必要性が主張される状況を鑑

篠崎

表1 上條茂（川上茂）による教育実践研究の動向

No.	年(元号)	月	書名・論考名
1	1920(大正9)	7	「学齡期児童の数概念—数概念の本質的考察に基ける調査—」(『信濃教育』第405号)
2		9	「理科教授の理論及実際」(『信濃教育』第407号)
3	1922(大正11)	2	「小学校低学年の理科教授を如何にすべきか」(初等教育研究会編『教育研究 臨時増刊』第431号)
4		9	「再び学齡期児童の数概念並びに低学年算数教授に於ける諸問題」(『信濃教育』第431号)
5	1923(大正12)	3	「児童の語彙(一)」(『信濃教育』第437号)
6		4	「児童の語彙(二)」(『信濃教育』第438号)
7		5	「児童の語彙(三)」(『信濃教育』第439号)
8		6	「児童の語彙(四)」(『信濃教育』第440号)
9		7	「児童の語彙(五)」(『信濃教育』第441号)
10		8	「児童の語彙(六)」(『信濃教育』第442号)
11	1924(大正13)	9	「児童の空間知覚」(『信濃教育』第455号)
12	1925(大正14)	7	「初学年児童の研究について」(『信濃教育』第465号)
13		10	「尋一児童の読み方及び書き方に関する研究」(久保良英主幹・青木誠四郎編『幼児之研究 第一集』中文館書店)
14	1926(大正15)	2	「児童道徳性の発達」(『信濃教育』第472号)
15	1927(昭和2)	1	「井出彌門氏の近著『数学読本』を讀みて」(『信濃教育』第483号)
16	1930(昭和5)	9	「児童数概念の調査—尋一入学児童に就て—」(『信濃教育』第527号)
17		10	「仮名教授に就いての一考察」(『信濃教育』第528号)
18	1932(昭和7)	2	「児童の道徳性の発達—悪の行為を通して見たる—」(『信濃教育』第544号)
19		3	「児童の道徳性の発達(二)—悪の行為を通して見たる—」(『信濃教育』第545号)
20	1933(昭和8)	9	「中等学校入学志願票『人物考査』の要項に就いて」(『信濃教育』第551号)
21		3	「児童の悪—児童の道徳性に関する一考察—」(『児童研究所紀要』第15巻)
22	1934(昭和9)	1	「新春を迎えて」(『信濃教育』第567号)
23	1935(昭和10)	6	「児童読物に就いて」(『信濃教育』第584号)
24	1939(昭和14)	10	「泉野学校を觀る」(『信濃教育』第636号)
25	1941(昭和16)	2	「児童計算能力の一考察」(『信濃教育』第652号)
26		4	「国民学校令の実施に当たりて」(『信濃教育』第654号)
27	1943(昭和18)	10	「教科外修練の実際」(『信濃教育』第684号)
28	1944(昭和19)	2	「大東亜教育研究会報告」(『信濃教育』第688号)
29		6	「決戦下の国民教育」(『信濃教育』第690号)
30	1945(昭和20)	7	「戦時教育令公布せらる」(『信濃教育』第703号)
31		11	「藤森先生に関する一端」(『信濃教育』第707号)
32	1948(昭和23)	7	「牛沢君と『信濃教育』」(『信濃教育』第739号)
33	1949(昭和24)	10	『小学校における才能教育の実際—1カ年の実験報告』(才能教育研究会)
34	1950(昭和25)	1	「才能教育について」(『信濃教育』第757号)
35		10	『児童に関する基礎調査』(浅間山房)

みて、上條自身が自分の研究をまとめたものである。大正期以降、児童研究に基づく教育実践研究を重視してきた上條自身、戦後新教育において児童の実態を捉える調査の重要性が認識されることを喜ばしく感じた。

また、上條は、本書をまとめるにあたり、「自分個人としては最近、一生を教育に捧げてきた過去の自分の姿を顧みたい気持ちにかられている」²²とし、中州尋常高等小学校、長野女子附小、池田尋常高等小学校で取り組んだ「児童の道徳性の発達」「児童の語彙」「学齡期児童の数概念」の調査研究をあげている。これは、上條が取り組んできた教育実践研究の中心が児童研究であり、またこれらがその後の教育実践に繋がる重要な研究成果であることを意味する。したがって、上條の児童研究は、長野男子附小着任前に在職した中州尋常高等小学校、長野女子附小、池田尋常高等小学校で行った研究の位置付けに着目して研究の展開を整理する必要がある。

上條茂の児童研究論

2.2 児童研究の展開

次に、上條が長野男子附小の着任するまでにどのように児童研究を展開したのかについて検討する。表1から上條が長野男子附小に着任するまでに発表した論考の中で児童研究に関わる論考を取り上げ、彼の経歴と関わらせてまとめたものが表2である。

表2 上條茂（川上茂）による児童研究の展開

時期	所属	No.	論考名（発行年月）	目次	備考		
1914年3月31日 ～1921年3月30日	諏訪郡中洲尋常高等 小学校訓導	1	「学龄期児童の数概念-数概念の本質的考察に基 ける調査-」（1920年7月）	(一)調査の必要 (二)調査の方法 (三)結果の整理について (四)調査の実際			
		2	「理科教授の理論及実際」（1920年9月）	前編 理科教授の理論 第一章 小学校理科の性質 第一節 理科の対象とする自然の意義 第二節 自然科学の意義及要件 第三節 自然科学的認識の特質及変遷 第四節 時代の要求-科学的独立の必要 第五節 小学校理科の本質-実験的機能的研究法 第二章 理科教授の特質 第三章 実験的帰納的教授の根拠 第一節 哲学的根拠 第二節 發生的根拠-個体発生史と種族発生史との一致- 第三節 心理学的根拠 第四節 教育的根拠 後編 理科教授の実際 第一章 目的論 第一節 理科教授の教育的価値 第二節 現今法令による理科教授の要旨 第三節 理科教授の目的 第二章 教材論 第一節 教材の選択 第二節 教材の配列 第三節 理科的実際問題 第三章 方法論 第一節 理科教授の態度 第二節 理科教授の本務 第三節 研究法の指導 第四節 指導案について 第五節 筆記帳について 第四章 低学年に於ける理科 第一節 低学年理科教授に対する見解 第二節 低学年理科教授の方針 第三節 低学年の理科教材 第五章 設備 第一節 教室の設備 第二節 教授用具及薬品 第三節 簡易器械標本模型製作 第四節 動物飼養 第五節 植物園			
1921年3月31日 ～1926年3月30日	長野県松本女子師範 学校附属小学校訓導	3	「小学校低学年の理科教授を如何にすべきか」 (1922年2月)	一 二			
		4	「再び学龄期児童の数概念について 並びに低学 年算数教授に於ける諸問題」(1922年9月)	一 二 三 四 二、数直観 三、数へる能力 四、数系列の理解 六、計算能力			
		5	「児童の語彙（一）」(1923年3月)	一、語彙調査の目的 二、調査の方法			
		6	「児童の語彙（二）」(1923年4月)	三、児童の語彙			
		7	「児童の語彙（三）」(1923年5月)	三、児童の語彙			
		8	「児童の語彙（四）」(1923年6月)	三、児童の語彙			
		9	「児童の語彙（五）」(1923年7月)	三、児童の語彙			
		10	「児童の語彙（六）」(1923年8月)	四、調査の結果			
		11	「児童の空間知覚」(1924年9月)	一 前書き 二 調査の方法 三 調査結果			
		12	「初学年児童の研究について」(1925年7月)	第一、児童研究の意味 一、児童研究の変遷 二、児童研究の教育的価値 第二、初学年児童研究の二三 一、尋一児童の五十音の読み方書き方に関する調査-綴方の初歩教授- 二、児童読書速度の発達の考察			
		13	「尋一児童の読み方及び書き方に関する研究」 (1925年10月)	一 二 三 四 五 六			
		14	「児童道徳性の発達」(1926年2月)	(一) (二) (三)			
		1926年3月31日 ～1930年3月30日	長野市後町尋常高等 小学校訓導	-	-	-	
		1930年3月31日 ～1933年3月30日	北安曇郡池田尋常高 等小学校訓導	16	「児童数概念の調査-尋一入学児童に就て-」 (1930年9月)	一 二 三 一、量の概念 二、数直観 三、数へる能力 四、数系列の理解 六、計算能力 七、完全なる数表示 四	
17	「仮名教授に就いての一考察」(1930年10月)						
18	「児童の道徳性の発達-悪の行為を通して見たる -」(1932年2月)			一 二 三 第一 悪行為の対象による分類 第二 悪行の彙類			
19	「児童の道徳性の発達(二)-悪の行為を通して 見たる-」(1932年3月)			第三 自覚の程度による悪行為の分類 四			
1933年3月31日 ～1936年3月30日	北安曇郡平尋常高等 小学校校長	21	「児童の悪-児童の道徳性に関する一考察-」 (1933年3月)	一、緒言 二、児童の観たる悪行為 三、行為の悪についての意識的性質 四、概括	青木誠四 郎と共著		
		23	「児童読物に就いて」(1935年6月)	-			
1936年3月31日 ～1939年3月30日	長野県視学(学務部 学務課)	25	「児童計算能力の一考察」(1941年2月)	-	杉崎路と 共著		

※「No.」は、表1の「No.」を表す。

表2から上條による児童研究の展開は、「研究に着手した時期」「研究の枠組みを完成させた時期」「追隨調査をした時期」の3つに区分できる。まず、「研究に着手した時期」は、初任校の中州尋常高等小学校に勤務した1914（大正3）年3月から1921（大正10）年3月30日までの時期である。この時期の上條について、長野県師範学校の同級生であった小口伊乙が次のように述べる²³。

「先輩青木誠四郎（心理学者後の東京家政大学学長）氏との協同研究は、後々まで君を支配したものがあつたのではないか。児童の精神構造や、その発達の機制を明らかにすることによって児童の教育、道徳教育等の科学的基礎を確立し、この立場から教科研究や教授研究にあくなき努力をかりたてて行ったようで、諏訪での藤森省吾氏の教育も若い上條君に厚い教育熱意をもえあがらせたのだと思う。」

小口の述 から分かるように、すでにこの時期に、上條は子供の個性調査を行い、それに基づいて、教科の教授に工夫をこらしていたことが分かる。その成果が、雑誌『信濃教育』に掲載された1920（大正9）年7月の「学齡期児童の数概念」（No.1）と同年9月の「理科教授の理論及實際」（No.2）と題する算術と理科教授に関わる研究成果の掲載である。この時期は、1917（大正6）年から1919（大正8）年にかけて開催された児童研究会の影響により、県内で児童研究が盛んに行われた時期²⁴である。上條による児童研究への着手は、児童研究が注目される長野県内の状況が影響したことも推測される。

続いて、「研究枠組みを完成させた時期」は、長野女子附小に勤務した1921～1926（大正10～15）年までの時期である。この時期は、理科、算数、国語、修身に関わる多くの研究成果を『信濃教育』等の雑誌に掲載している。理科は「小学校低学年の理科教授を如何にすべきか」（No.3）、算数は「再び学齡期児童の数概念」（No.4）、「児童の空間知覚」（No.11）、国語は「児童の語彙（一）～（六）」（No.5～10）、「初学年児童の研究について」（No.12）、「尋一児童の読み方及び書き方に関する研究」（No.13）、修身は「児童道徳性の発達」（No.14）がある。また、これらの研究の枠組みは、「初学年児童の研究について」（No.12）の中で述べている。

最後に、「追隨調査をした時期」は、長野市後町尋常高等小学校、北安曇郡池田尋常高等小学校、北安曇郡平尋常高等小学校に勤務した1926～1936（昭和元～11）年までの時期である。この時期には、算数、国語、修身の研究を行い、「児童数概念の調査—尋一入学児童に就て—」（No.16）、「仮名教授に就いての一考察」（No.17）、「児童の道徳性の発達、（二）」（No.18, 19）「児童の悪—児童の道徳性に関する一考察—」（No.21）にまとめている。この時期の上條の研究状況と関わる記録として、後町尋常高等小学校では、1927（昭和2）年に、「読方・算術につきての児童能力調査」「読方教授につきての研究」を行ったこと、1928（昭和3）年に、「児童調査につきて参考となりし実例」「算数・国語テストにつきて」を行ったことを残している²⁵。特に、1927年度の研究については、以下のように記述している²⁶。

「児童各自の学習を高め、一面成績不良なる児童の救済をはかることについては、既に

数年来の問題として研究考慮されて来た。そこで、本来は先ず読方、算術の二科目につきて児童の能力を調査し、前述の目的に副う第一歩たらしめたい。読方については、調査が進むにつれて多くの問題があり、尚研究中である。一方、算術については、研究の結果児童の能力を知るために主として算術教科書に拠って問題を選択し尋常二年より高等二年までの児童に亘って調査をした。これによって一この児童の能力を知ると同時に学級全体の成績を知ることができた。尚、将来も研究を継続し、児童の算術能力の増進おはかり、成績不良の児童の救済をはかる。」

こうした研究の背景は、先行研究でも指摘されているように青木との関わりがある²⁷。青木は、上條が長野県師範学校時代の二級先輩である。上條が長野女子附小(1921～1926)時代には、初等教育講習会で指導を受けている。当校の『学校日誌』によれば、青木が行った指導として「大正10年1月4, 5, 6日、『童話の心理学研究』という題で講演」「大正15年1月8, 9, 10日, 指導」が記録されている²⁸。北安曇郡平尋常高等小学校長時代には、児童研究所²⁹に所属して青木の指導を受けている。その成果は、青木と共同でまとめて『児童研究所紀要』(1933年)に掲載された「児童の悪—児童の道德性に関する一考察—」(No.21)に表れている。のちに上條は、この研究における青木の指導との関わりについて、次のように述べている³⁰。

「児童道德性の発達は(信濃教育五四四号所載)児童の悪行為について質問法によつて記載を求め、これをその悪行為の対象によつて分類し、或は悪行為に伴う意識性を分析して、道德性の発達を明らかにしようとしたものである。その方法については専ら青木誠四郎先生の御指導によつたものである。」

また、池田小学校時代は、校内研究の指導者として青木の指導を受けた。このことについて、当時、池田小学校で上條と同僚であった内川清士訓導は次のように述べている³¹。

「青木誠四郎先生を単独にお招きしています。児童の成績考査に関するお話を聞いています。三十代の上條先生が東京帝大助教授青木誠四郎先生とすでにかかわりをもつておられたわけでありませう。」

その後の平小学校時代においても、教員研修の場として研究授業を重視した。この際、研究は校長である上條が中心となって行ったが、青木の指導下で行われた。このことについて、当時の同僚であった西山千明は次のように述べている³²。

「基礎研究として『児童心理』の研究は、校長が中心になつて行い、青木誠四郎先生の御指導を得て『算数の全校調査』や、『読み物調査』など実施された。」

こうした経験により、後に上條は、信濃教育会の研究調査委員として理科(大正9・10年)、理科学習帳並びに教授書修正(昭和2年)、補修数学教科書修正(大正14年)、家事学習帳(昭和2年)、家事教授書(昭和5年)、綴方の研究編纂(昭和8年)、青少年読物調査(昭和10年)に関わることとなる。

では、こうした中で展開された上條の児童研究はどのような目的に基づき、どのような内容と方法で行われたか。次に、上條の児童研究の目的、内容、方法について検討する。

3. 児童研究の目的と方法

3.1 児童研究の目的

上條の児童研究に関する基本的な考え方は、「初学年児童の研究について」(No.12)に表れている。

まず、児童研究の教育的価値として、上條は次の3点をあげている³³。

「(1) 教育の出発点を与へ教育の指導原理となると思ひます。教育の指導原理となると思ひます。教育の対象たる児童を知らずしては妥当なる教育はなされない。といふ事は見易い理であると思ひます。(2) 又児童の心理的発達の問題を知るることによつて始めて教科の始期内容等の問題が解決されると思ひます。例へば初学年の教科に於て習字は毛筆は何年頃から始むべきか硬筆は如何、図書は教則には『一二年は一時間づゝ之を課することを得』となつているが、実際子供の発達を見る時に当然初学年から課すべきこと、理科も自然科として初学年から、綴方も一年から当然始むべきものなること、又修身などは、尋四年位の児童にして始めて道徳的自覚期に入ると思はれるが、修身教授は何年から始むべきか、算数は如何等の教科の始期の問題、内容の問題は児童そのものを知ることによつて解決せらるゝものと思ひます。(3) 児童の学習過程を知れば適切なる教育がなされる、又教育の効果を知り教授上に反省を加へて行ける。」

ここから上條は、児童研究を「教育の指導原理」と捉えていることが分かる。「児童を知らずして妥当なる教育はなされない」という捉えは、上條の根本にある教育観と言える。そして、児童研究により「児童の心理発達の課題を知る」ことと「学習過程と学習の効果をj知る」ことを重視する。

次に、児童研究が持つ役割を最大限に発揮するために上條は、「自然的な総合的な観察的方法」³⁴を研究方法として上げる。そして、次の3つを児童研究実施の上での注意点として述べる。1つ目は、児童の精神的産物である言語、綴方、図画、手工品等を研究対象とすることである。上條は、「一つの作画、推理も、知情意全部の融合作用として為される故に、児童の眞の姿は最も複雑なる彼等の精神的産物に最もよく表れる」³⁵とする。2つ目は、分析的実験的な方法ではなく、自然的な観察法を研究方法として用いることである。上條は、それまでの分析的で分析的な研究方法ではなく、母が我が子に向ける愛のように、「児童の生活に対して愛しつゝ見入る力、それは必ず児童の眞の姿を掴む唯一の道」³⁶と述べる。3つ目は、児童の個性の究明を行うことである。上條は、児童を広く眺めて普遍性を抽出するより、その児童の長い期間の記録を蓄積して発達を捉えることを重視する。

3.2 児童研究の内容と方法

では、以上のような児童研究に対する考えは、どのように具体化されたのか。表2で示した児童研究に関わる論考から児童研究の内容について整理すると表3になる。

表3から確認できることは次の2点である。第一は、修身、国語、算数、理科の教授に関わる児童の実態調査を扱っていることである。修身は「児童の善行為」と「児童の悪行

上條茂の児童研究論

表3 上條茂（川上茂）による児童研究の内容と方法

教科	No.	論文名 (発行年月)	児童研究	調査方法	調査対象(調査時期)	分析方法	備考
修身	14	「児童道徳性の発達」(1926.2)	児童の善行	①児童に善行について書かせる。 「皆さんは此の頃善いことをしたことがあるでせう。」「今日はその事についてなるべく詳しく書いて貰ひませう。何でもある人はいくつも書いて下さい。」	松本女子師範学校附属小学校専一から高等367名(1924年9月)	記述内容を分類(①善行の対象による分類、②善行の種類、③善行の自覚の程度による分類)。	
	18	「児童の道徳性の発達」(二) (1932.2-3)	児童の悪行	「皆さんはこの頃悪いことをしたことがあるでせう。」「無いといふ児童があったら、よく考へてごらんきつと誰でもあるものだよと説明。」「その中で一番悪かったと思ふことを一つなるべくくわしく(こまかに)書いてごらん。」「その他暗示的なことは教師から何にも言わぬ。」	北安曇池田小学校専一から高等647名(1931年3月)	記述内容を以下の三側面から考察し統計的に処理する。一、悪行の対象による分類 二、善行の種類 三、悪行の自覚の程度による分類。	
	21		児童の悪行	「皆さんはこの頃悪いことをしたことがあるでせう。」「無いといふ小児があったら、よく考へてごらん、きつと誰でもあるものだよと説明す。」「その中で一番悪かったと思ふことを一つなるべくくわしく書いてごらん。」「※必ず筆答。高等年児童(専五以上)は自然感情の発生の関係を感じて無記名で回答。」	北安曇池田小学校専一から高等647名(1931年3月)	同上	青木誠四郎との共著。No.18,19の調査と同様。
国語	5~10	「児童の語彙(一)~(六)」(1923.3-8)	語彙調査	専一入学の二人の児童の発表語を観察記録。	松本女子師範学校附属小学校専一男子1名、女子1名(1923年度内1年間)	男子、女子各一名の発表語の語彙を品詞分類(名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、助動詞、接統詞、感動詞、敬詞、助詞、助数詞)により観察し、言語上に現われる男女児童の心理的差異を考察。	
	12	「初学年児童の研究について」(1925.7)	専一児童の五十音の読み方書き方に関する調査	五十音中重複せる文字を除いて四十八字を五十音順でなく、ト、リ、ナ、ク、コ、フ、ス・・・の順に排列し一枚の紙に印刷し之を児童に一枚ずつ配当し、四月、六月に於ける読字数を調べた。	松本女子師範学校附属小学校専一29名(1922年4月~6月)	児童の読字の発達を考察。	
			児童の読書速度	国語読本の後期用を10分間に読了した語彙数を調査。	松本女子師範学校附属小学校専一29名(1922年12月)	児童の読書速度の発達の考察。	
	13	「専一児童の読み方及び書き方に関する研究」(1925.10)	専一児童の五十音の読み方書き方に関する調査	50音の読み得る者を調査(No.12と同様)。	松本女子師範学校附属小学校専一29名(1922年4月~6月)	No.12と同様	
	17	「仮名教授に就いての一考察」(1930.10)	仮名教授の状況	綴り方による仮名教授の効果測定。	松本女子師範学校附属小学校専一男子14名、女子16名(1922年度)、長野市後町小学校専一男子25名、女子23名(1929年度)、北安曇池田小学校専一男子16名、女子18名(1930年度)	No.12と同様。	考察。
	23	「児童読物に就いて」(1935.6)	読書傾向	北安曇郡下各小学校、通年制補習学校の児童生徒が1934年4月から6月にかけて読んだ単行本を分析し、児童生徒の読書の傾向をつかむ。	北安曇郡下各小学校、通年制補習学校の児童生徒(1934年4月~6月)		
	1	「学齢期児童の数概念-数概念の本質的考察に基ける調査-」(1920.7)	数概念(量の概念、数直観、数へる能力、計算能力、数系列の理解、数系統の理解、完全なる数表示)	一、量の概念(不定数の概念)：箸の把の多少判断(十本を一把としたものを十把と十五把の比較)、小石多少判断(大きさの略等数の十五と二十)、マリの多少判断(二十と二十五)、長さの長短判断、目方の軽重判断、面積の大小識別(紙、土地)、体積 二、数直観：実物の直感(指、箸、マリの数)、数図の直感(一より五までの種々なる排列にした数図、赤、青、黄、白黒の五つの数図) 三、数へる能力の調査：実物について、実物を離れて 四、計算能力の調査：A.実物を離れた次の加へ算を事実問題の形によつて質問し答へしめて、その正誤を調ふ。B.実物についての前の計算をなすむ。C.実物を離れた次の引き算を事実問題の形によつて質問し答へしめてその正誤を調ふ。 五、数系の理解調査：5-1, 5+1, 7-1, 7+1, 13-1, 13+1, 4と5の比較、4と5の差、13と14の比較、13と14の差 六、数系統理解の調査：一と十とどつちが多いか、十と百とどつちが多いか、一つかいくつよせると十になるか、十をいくつよせると百になるか 七、完全なる数表示の如何：諏訪郡教育会編纂の算術細目に出て来る名数について調査 八、児童の数概念と環境との関係：児童の不定数の概念、数直観、数へる能力、計算能力数系列の理解、数系統の理解、完全なる数表示についてその優劣により、上、中、下の三等に区分し、之を児童の環境との関係して表示	諏訪郡中洲尋常高等小学校専一男子15名、女子15名(1920年4、5月)	結果を児童の環境よ関係せしめ、考察して「数概念と環境との関係」をも調査する。	
算数	4	「再び学齢期児童の数概念について並びに低学年算数教授に於ける諸問題」(1922.9)	数概念(量の概念、数直観、数へる能力、計算能力、数系列の理解、数系統の理解、完全なる数表示)	調査方法は、No.1と同様。	松本女子師範学校附属小学校専一男子14名、女子16名(1922年4、5月)	No.1の中洲尋常高等小学校に於ける児童のデータと比較。	3人の教生の協力。
	11	「児童の空間知覚」(1924.9)	空間知覚	専三児童の空間表象の正否、個人差及び之等空間表象の正否と学業成績との関係の考察。	松本女子師範学校附属小学校専三男子16名、女子17名(1924年7月17日第4時)		
	16	「児童数概念の調査-専一入学児童に就いて-」(1930.9)	数概念(量の概念、数直観、数へる能力、計算能力、数系列の理解、数系統の理解、完全なる数表示)	調査方法は、No.1と同様。	諏訪郡中洲尋常高等小学校専一男子15名、女子15名(1920年度)、松本女子師範学校附属小学校専一男子14名、女子16名(1922年度)、長野市後町小学校専一男子25名、女子23名(1929年度)、北安曇池田小学校専一男子16名、女子18名(1930年度)	結果を児童の環境よ関係せしめ、考察して「数概念と環境との関係」をも調査する。	これまでの研究成果の整理。
理科	25	「児童計算能力の一考察」(1941.2)	コーチス算術検査	コーチス算術検査第七その二：(1)四則の計算の過程に関する知識と其の統制、(2)基本的な組合の知識、(3)「借り」たり「貸し」たりする能力、(4)数学を書寫する能力、(5)指針に従ふ能力など四則の計算能力を測定。	長野県下の学校(1922年、1940年)	算術教科書の改訂にともなう大正11年と大正15年における児童の発達状況調査。	杉崎浩との共著。
	2	「理科教授の理論及実際」(1920.9)	疑問の調査	理科事象及現象に関する疑問調査。「皆さんの、これは不思議だと思ふこと又わからないから先生に聞きたいと思ふことを何んでもよいから、遠慮なく御聞きなさい。」という問題を専一、二は口答、専三、四は筆答させる。	諏訪郡中洲尋常高等小学校専一~四(1920年4月)	調査で得たデータを理科的疑問と理科以外に分類。理科的疑問は、植物、動物、鉱物、生理、物理、化学、天文気象、地文に分けている。	

※「No.」は、表1の「No.」を表す。

為」、国語は「語彙調査」「尋一児童への五十音の読み方書き方に関する調査」「児童の読書速度」「読書傾向」、算数は「数概念」「計算能力」の調査、理科は「疑問調査」である。修身の「児童の善行為」と「児童の悪行為」は、児童が善い、悪いと思うことについての認1学年の男子、女子各1名の発表語を観察法により調査し、発表後の語彙を品詞により分識を質問紙にて調査し、「道德性の発達」を明らかにしている。国語の「語彙調査」は、第類して言語上に現われる男女児童の心理的差異を考察している。「尋一児童への五十音の読み方書き方に関する調査」は読字の発達、「児童の読書速度」は、読書速度の発達過程を明らかにしようとしている。「数概念」は量の観念、数直観、計算能力、数系列の理解、数系統の理解を児童の環境との関わりから考察している。「疑問調査」は、理科的事象に関わって児童が不思議だと思うことについて、第1, 2学年は口頭、第3, 4学年は筆答により調査している。

第二は、個人差や発達の状況を踏まえた研究を行っていることである。個人差については、「児童の語彙(一)～(六)」(No.5～10)における男子、女子各一名の児童の言語観察を行い、語彙を品詞分類により観察し、言語上に現われる男女児童の心理的差異を考察するような方法がそれにあたる。発達の状況については、「児童計算能力の一考察」(No.25)における算術教科書の改訂にともなう1922(大正11)年と1926(大正15)年における児童の発達状況調査が挙げられる。

以上のような、上條が蓄積してきた児童研究の成果は、国民学校期における長野男子附小の教育実践研究の基盤となる。次に、上條茂の児童研究と国民学校期の教育実践研究との関わりを検討する。

4. 国民学校期の教育実践研究における上條茂の児童研究の役割

4.1 児童研究に基づく教科研究の推進

上條が長野男子附小に着任したのは、研究学級³⁷が閉鎖(1937年3月)した2年後の1939年3月である。表4は、上條が着任する前年度の1938年度から国民学校期の長野男子附小の初等教育講習会における発表内容をまとめたものである。表4から、長野男子附小における教科研究の動向と児童研究との関わりについて次のことが確認できる。

まず、上條の着任により、児童研究に基づく教科研究に着手したことである。先述のように、上條が着任する1年前の1938年度の長野男子附小の研究は、国定教科書に基づく教材研究であった。表1によれば、1938年度の報告内容は「地理教材とその取扱」(高池義則)、「歴史教材とその取扱」(丸山久雄)のように教材の取り扱いが多い。また、高池の報告は、「一、小学校国語読本中の地理的教材」「二、地理的教材の取扱精神」から構成され、国定教科書における教材について発表している³⁸。しかし、上條が着任した1939年度からの研究内容は変化する。上條は、「児童道德性と修身教育上の二三の問題」と題して、児童の道德性を踏まえた修身教育のあり方を提案している。当日配布された『初等教育講習会要項』(1940年)によれば、発表内容は、「一、児童研究に必要」「二、児童道德性発

上條茂の児童研究論

表 4 初等教育講習会にみる児童研究の推進

年度(年月)	1938(1939年1月)	1939(1940年1月)	1940(1941年1月)	1941(1942年1月)	1942(1943年1月)	1943(1944年1月)
テーマ (講師名)	記紀教材とその取扱(小池直太郎)	尋常小学算術に横たわる数学の問題(井出弥門)	国民学校の根本方針(清水国人)	国民学校教育の根本性格(清水国人)	国民学校と道(清水国人)	決戦下の国民教育(清水国人)
	地理教材とその取扱(高池義則)	尋常小学算術の主要教材とその取扱に就て(新津 寛)	国民学校の実施に当りて(上条 茂)	「ヨイドモ」取扱の実際(吉池勘右衛門)	国民学校経営の主要問題(上条 茂)	「皇国の道」の実践指導(吉池勘右衛門)
	関孝和と和算(井出弥門)	読方教授に於ける指導過程について(横山秀男)	修身教授に於ける二三の問題(渡邊正雄)	「ヨミカタ」指導の実際(太田美明)	国民学校に於ける礼法の指導(中村一雄)	国民科国語話方指導の実際(下島 敏)
	読方教材と唱歌教授(武田宇作)	理科学習帳修正の要点(牛山今朝平)	児童語彙 と国民科国語の二三問題(磯川準一)	「カズノホン」取扱の実際(吉岡正幸)	児童の言語生活 と国語指導(帯刀 貞一)	国民科国史の使命とその指導(有賀 義男)
	読方教授と綴方指導(宮下 功)	理科学習帳に於ける生物教材の取扱(横間正喜)	国民科国史の使命とその実践について(青木廣助)	「自然の観察」の観点と指導の実際(久保義幸)	綴り方類型調査 と指導体系(神波 利夫)	工作技術の問題(藤森友義)
	歴史教材とその取扱(丸山久雄)	現行尋常小学修身書の機構と取扱上の諸問題(渡邊 広)	国民科地理の意義とその取扱(宮島進)	芸能科音楽の特質とその取扱(和田五郎)	課外読み物についての一考察(新井芳美)	国土意識啓蒙の地理的修練(隠岐 忠)
	科学教材とその取扱(牛山今朝平)	児童道徳性 と修身教育上の二三の問題(上条 茂)	初学年児童 の取扱に就いて(太田美明)	国民学校に於ける総合教育(隠岐 清文)	「城土の観察」取扱の実際(中山 清文)	保健調査 と健康教育(磯川準一)
	理科教材とその取扱(清澤晴親)			国民学校に於ける生活指導(上条 茂)	児童の教理生活 と技術的修練(柳原正行)	国民学校に於ける科学的技術修練(赤羽千鶴)
				理科理科と 児童の科学的 生活の指導(丸山利雄)	国民学校学簿の取扱(上条茂)	

(長野県師範学校男子部附属小学校・同国民学校『初等教育講習会要項』(1939～1943年)より作成)

※太字は、児童研究に関わる事項を示す。

達的考察」「三、児童道徳性の発達と訓育」「四、児童道徳性の発達と修身教授」から構成されている³⁹。詳細は記されていないため、具体的内容は不明ではあるが、発表の構成から児童研究を重視した教科研究を推進しようとする上條の意図を捉えることができる。

次に、1940年度から、児童研究を強調して国民学校案に対応していることが確認できる。長野男子附小は、1940年9月以降から、国民学校案の先行実施を行うが、その際に強調したのが児童の実態を踏まえて国定教科書を活用することであった。例えば、県内の学校に先駆けて実施した国民学校制度の成果を公開した信濃毎日新聞社主催の「国民学校の先行経験を語る座談会」(2月13日)において、上條は、国民学校の教育のあり方を「新教科書を活用し、知識技能の体得を図るため児童心身の発達、男女の特性、個性、郷土的環境に基く適切なる細目を編成すること」⁴⁰と述べている。そのため、1940年度の初等教育講習会では、「児童語彙と国民科国語の二三問題」(磯川準一)や「初学年児童の取扱に就いて」(太田美明)のように児童の実態に基づいた教科研究が行われている⁴¹。磯川の報告は、「一、児童語彙調査の目的」「二、児童語彙調査の方法」「三、児童語彙の考察」「四、国民科国語の二三問題」⁴²からなり、太田の報告は、「一、就学前児童の生活」「二、初学年児童の特質とその扱い」「三、総合的教授論」「四、初学年担任訓導論」⁴³からなり、対象学年の児童の実態と教授の関わりを重視している。

第三は、国民学校令による教科研究が本格化する1941年度以降は、児童研究に基づく教科実践の実施を確認できることである。先述のように、1941年4月以降の長野男子附小では、上條を中心に教科研究を行い、1941年10月5日に『国民学校教科の実践的研究』として研究成果を発行している。そこには、研究成果について次のように述べている⁴⁴。

「当校附属国民学校職員亦この精神を以て、日常教育に精進しつゝありたる所、今回国民学校制度実施を機会に国民学校教科についての実践的研究を取纏め、茲に『国民学校教科の実践的研究』なる一書を刊行することとなつた。載する所、国民学校教育の精神、その方法的特質を始め、国民学校の全教科・教科に互つて忠実に法規の精神に則り、多年の教育実践の経験に基づき、国民学校教科・科目の実際指導についての詳細なる研究を為したものである。殊に各教科・科目に互つて、その教育の歴史的変遷を究め、国民学校の教科・科目として定位さるべき必然性を明らかにし実践的立場より教科・科目の本義を究め、これが実際指導の方法的体系を明らかにした点は、国民学校教育に直接携はる者のみならず一般の者のみならず一般父兄の方々にも参考となる所からざるべきを信ずる者である。」

ここでは、国民学校教科についての実践的研究の経験から「実際指導の方法的体系」を明らかにしたことに触れている。そして、これが 11 冊の国民学校叢書として具体化される。11 冊は、『国民学校成績考査の研究』（1942 年）、『国民学校に於ける総合授業』（1942 年）、『児童の疑問と理科指導』（1942 年）、『児童の数理生活と技術的修練』（1943 年）、『芸能科音楽指導の諸問題』（1943 年）、『児童の語彙と国語指導』（1944 年）、『児童道徳生活の指導』（1944 年）、『郷土観察指導の実際』（1944 年）、『保健調査と健康教育』（1945 年）、『綴り方指導の実際』（1946 年）、『児童の数理的技術修練の実際』（1946）からなる。これらと、1941 年度の初等教育講習会の報告内容とを比較すると、タイトルの重なりが見られ、国民学校叢書に関わる成果が初等教育講習会で報告されていることが確認できる。

4.2 国民学校叢書の作成と上條茂の児童研究

次に、国民学校叢書と児童研究との関わりについて確認する。先述のように、国民学校叢書の編纂は、上條が次に述べるように指導者の指導を受けて行われた⁴⁵。

「尚平素絶えず当校職員の修養・教育に対して御指導御鞭撻を賜はつてゐる木村素衛先生・西尾実先生・青木誠四郎先生に対して職員一同深甚なる経緯と感謝の念を捧ぐる次第である。更に木村先生には『国民学校の基礎問題』、『国民学校教育方法論の基礎問題』についての御講義頂き尚教室の実際にも御指導賜り、西尾先生には『国民科国語の諸問題』について御講義戴き又国語教室の実際についても御指導賜はつたのである。青木先生には『学習心理について』『成績考査について』『精神の発達段階と国民学校生活』について御講義頂その他操行査察について、健康調査表について道徳行為の調査について等児童調査の具体的事項について御指導賜はつてゐるのである。」

こうした指導者との関わりを踏まえて国民学校叢書に於ける児童研究を記したのが表 5 である。ここでは、表 3 で示した上條が長野男子附小への着任前に行った児童研究との比較から対応関係を示してある。

表 3 から確認できることは次の 3 点である。1 点目は、上條が着任前に行った「道徳性の発達」「児童の語彙」「児童の疑問」研究との関連が見られることである。「道徳性の発達」

上條茂の児童研究論

表 5 国民学校叢書と児童研究

No	発行年月	書名	児童研究	指導者
1	1942年7月	『国民学校成績考査の研究』	なし	青木誠四郎
2	1942年10月	『国民学校に於ける総合授業』	初等科第一学年の児童の心身発達調査	青木誠四郎
3	1943年1月	『児童の疑問と理科指導』	児童疑問の調査	青木誠四郎
4	1943年10月	『児童の数理生活と技術的修練』	児童の数理生活の調査	青木誠四郎
5	1943年11月	『芸能科音楽科指導の諸問題』	芸能科音楽に於ける4分野（基礎練習、歌唱、鑑賞、器楽）に対する児童の態度 児童愛好歌曲の調査 音域の調査 聴覚訓練に対する諸問題 和音の表情	青木誠四郎
6	1944年3月	『児童の語彙と国語指導』	児童の語彙の調査	西尾実 青木誠四郎
7	1944年6月	『児童道徳生活の指導』	児童の道徳的行為の調査	青木誠四郎
8	1944年7月	『郷土観察指導の実際』	児童の生活調査	青木誠四郎
9	1945年8月	『健康調査と健康教育』	健康調査	青木誠四郎
10	1946年4月	『綴り方指導の実際』	綴る働の類型調査	西尾実
11	1946年7月	『児童の数理的技術的修練の実際』	『児童の数理生活と技術的修練』の具体化のためなし	青木誠四郎

※網掛けは、表 3 で示した上條の児童研究と重なるものを示している。

は、修身教授のために行われたもので、『児童道徳生活の指導』（1944年）と、「児童の語彙」は、国語科教授のために行われたもので『児童の語彙と国語指導』（1944年）、「児童の疑問」は理科教授であり、『児童の疑問と理科指導』（1943年）が重なる。

2点目は、「郷土の観察」「健康調査」「数理」「芸能科」は、着任以前の上條の児童研究において重なるものがなく、新たに行われたものである。

以上の背景は、1941～1943年度における当校の研究動向から説明できる。先述のように当校の児童研究を進める上で指針となったのは青木の指導である。具体的に、長野男子附小が青木から受けた指導は、学習心理、成績考査、精神の発達段階等である。具体的には、1941年度は、「学習心理学」（7月30、31日）、「成績考査について」（8月29日）、「児童精神発達の段階と国民学校生活」（10月26日）、「当校の諸研究物についての指導」（1月26日）⁴⁶、1942年度は、「成績品に関する指導」（5月8日、9月10日）⁴⁷、1943年度は、「児童研究の意義と方法、当校の研究について」（5月15、16日）⁴⁸の指導を受けている。この中で重要な指導は、「学習心理学」（1941年7月30、31日）と「児童研究の意義と方法、当校の研究について」（5月15、16日）の2つである。「学習心理学」では、青木の講習会の後、青木と訓導との間で「道徳生活調査」「操行査察」「指導過程ノ問題」等の検討が行われている⁴⁹。「道徳生活調査」については、「四季に於ける児童道徳行為（善行為と悪行為）の調査」の「目的」「調査方法」「実施時期及期間」「調査上の注意事項」「調査結果の整理」の5項目について、修身係が報告して青木の指導を受けている⁵⁰。また、「児童研究の意義と方法、当校の研究について」は、上條が「基礎づけのような意味合いに於てお願いした」⁵¹と述べているように、長野男子附小の児童研究の基盤となっている。そこでは、「児童研究の態度」「児童研究の企画」「結果の整理と解釈」の3点について指導を受けている。したがって、長野男子附小では、上條を中心とする訓導たちによる児童研

究の計画を青木の指導を受けて、精 化してまとめていくという作業が行われていたと言える。故に、上條が長野男子附小に着任する前に蓄積した児童研究の成果は、訓導たちの研究の基盤として機能していたことが推測される。青木自身も上條を中心として行われる研究について、「深い敬意と感謝とを懐く」⁵²と評価している。

4.3 各教科における児童研究の役割

では、上條の児童研究は具体的にどのように反映されていたか。上條の児童研究との関わりがある修身、国語、理科を取り上げて内容を整理すると表6のようになる。表6に示したそれぞれの児童研究を表3で示した上條が長野男子附小着任前に取り組んだ児童研究と比較すると次のことが確認できる。なお、表6の児童研究と表3の児童研究との対応は、次の通りである。理科は「理科教授の理論及実際」(No.2)、国語は、「児童の語彙(一)～(完)」(No.5～10)、修身は「児童の道德性の発達」(No.14)と「児童の道德性の発達、(二)」(No.18, 19)。

第一は、長野男子附小で取り組んだ児童研究は、各教科の教授で利用することを意識した明確な目的を掲げて実施されていることである。理科と国語は、7つの目的を掲げて、児童の疑問と児童の語彙の実態を明らかにしようとしている。修身は、3つの観点を示した上で、児童の「道徳的行為の具体的様相」を調査し、各学年の「特質」を把握した上で、「児童の日常生活に於ける実践に即応したる道徳生活指導の体系」⁵³を明らかにしようとしている。

第二は、上條の児童研究と長野男子附小の児童研究の調査方法がほぼ一致することである。それぞれの児童研究の調査方法について、表3と表6とを比較すると、ほぼ同じ質問項目と手順で調査が行われていることが分かる。例えば、修身における「昨日学校から帰ってねるまでの間、今朝起きてから学校にくるまでの間、学校へ来てから今までのこと、昨日(日曜日)一日にしたことのうちで、よいこととわるいこと」という項目は、上條が既に行っている「児童の善行為」「児童の悪行為」を明らかにするための内容である。

第三は、児童研究で採取したデータを整理して分析を行う視点と方法が深化していることである。例えば、理科の「児童疑問調査」においては、上條が行ったものは、調査データを「理科的疑問」と「理科以外」に分類し、「理科的疑問」を「植物、動物、鉱物、生理、物理、化学、天文気象、地文」に分けている。しかし、長野男子附小で行ったものは、調査データを「疑問の分類」として「自然物」「自然現象」「人工物」というより詳細な観点で分類した上で、「整理の経過」で示した方法により統計的な処理を試みている。これは、先述のように、青木の指導により児童研究で得たデータを整理する方法論についても深めた上で実施したことが理由として考えられる。

上條茂の児童研究論

表6 国民学校叢書における上條の児童研究の役割

書名 (発行年月日)	児童研究	目的	調査方法	調査対象 (調査時期)	分析方法
『児童の疑問と理科指導』 (1943年1月8日)	児童疑問の調査	1 国民学校の実施と共に「自然の観察」として低学年理科が課せられることになったのであるが、この期の児童は如何なる方面に疑問を抱き興味を感ずるものであるか。 2 児童疑問の中、理科学習の根柢となる所謂理科的疑問とも言ふべきものは他の疑問に比して如何なる現れを示すものであろうか。 3 更に理科的疑問に於て児童は如何なる自然の事物事象に疑問を抱くものであるか。 4 それ等理科的疑問の内容は、児童心意の発達即ち学年的発達に於て如何なる状況になるか。 5 理科学習にあたり高学年女子の指導には考慮すべき点が多分にあるがその抱く疑問に於ても性別の相違は如何に現れるものであるか。 6 四季によって疑問の内容に相違を見ることが出来るであろうか、即ち事象に対する関心と季節的關係は如何にあるか。 7 環境の相違が児童の関心と興味の対象に多大の影響を与えることは当然であるが、具体的な異様としてどう現れるであろうか。	秋冬春夏の各一季ずつ、授業中に行う全校児童への一斉質問紙調査(質問紙の項目「日頃わからないことで聞きたいと思うことを何でも書きなさい」)	①全校児童男子363名、女子307名(1941年11月) ②全校児童男子358名、女子299名(1942年2月) ③全校児童男子312名、女子278名(1942年5月) ④全校児童男子315名、女子289名(1942年7月)	一、疑問の分類 ①自然物(動物、植物、鉱物、人体) ②自然現象(地象、天象、気象、物理現象、化学現象) ③人工物(製作物、合成品加工品、科学兵器) 二、整理の経過 (1) 児童が提出した調査用紙を検討し、その疑問の中より男女別に理科的疑問とすべきものを抽出して分類項目に従って児童疑問の実際を書き上げる。 (2) 学年別に整理したものを各項目別に用紙(大方眼紙)に季節別に更に男女別に一覧出来るように疑問の実際を記載。 (3) 各項目別にその総数について統計的な整理を行う。 (4) 学年別に男女共通な疑問、男女のみの疑問、女子のみの疑問として整理し、疑問の具体的な内容を明らかにし各種研究の資料たらしめん。
『児童の語彙と国語指導』 (1944年3月15日)	児童の語彙の調査	1 児童は如何なる語彙を習得し、それを日常生活において如何に駆使しているか。 2 児童語彙の習得過程は如何なる方法を辿るものであるか。 3 児童各期の発達に即応して児童の語彙は如何に拡充せられ、如何に意味づけられていくものであるか。 4 性別による児童語彙の差異、関係。 5 時代の変遷によって児童語彙は如何に変化するものであるか、その変化に及ぼす時代的条件は如何なるものであるか。 6 品詞別にみたる児童語彙とその関係及び活用形の使用について。 7 国語教科書の語彙と児童語彙は如何なる関係にあるか。	第1・3・6学年児童に対して1年間をかけて、児童の日常生活において自由駆使している使用語を観察し摘記しそのすべてを手帳に記載し、これをカードに転載して品詞別に整理し五十音順に配列。	調査児童の選定：(1) 各期即ち1年3年6年に於ける男女各1名宛を選定したこと。(2) 生後より主として当地において生育し当地に於ける語彙を習得している者。(3) 特別な事情のない家庭の者。(4) 男女の生年月日がなるべく近接している者。(5) 調査者に親しみ易い児童であること。	・採集した語彙を品詞別に分類して考察し又国語教科書の語彙は児童語彙と同様に品詞別に整理し、児童の語彙と比較研究する。 ・調査語彙に客観性をもたせるために、なるべく選択条件に近い同学年の児童を十名ずつ選びそれらの児童も使用しているかを調査。
『児童道徳生活の指導』(1944年6月20日)	児童の道徳的行為の調査	1 児童道徳的行為の領域 2 児童道徳行為の対象 3 児童道徳的行為の内容より児童の道徳的行為の具体的様相を調査し、それに基づいて各学年に於ける道徳的行為の特質を把握し、児童の日常生活に於ける実践に即応したる道徳生活指導の体系を樹立し、国民科修身指導の目的達成に寄与せんとした。	全校児童に調査用紙を配布し記載させる。(昨日学校から帰って来るまでの間、今朝起きてから学校に行くまでの間、学校へ来てから今までのこと、昨日(日曜日)1日にしたことのうちで、よいこととわるいこと)	全校児童男子8,867名、女子7,494名(1941年5月4日から1週間、9月6日から1週間、11月23日から1週間、1942年1月29日から1週間)	1 児童道徳的行為の領域 2 児童道徳行為の対象 3 児童道徳的行為の内容に基づいて整理。

5. 結語

本稿の目的は、上條における児童研究の性格について、国民学校期の教育実践研究における役割に着目して明らかにすることであった。以上の検討を通して明らかになったことは次の諸点である。

第一は、上條が戦前期に取り組んだ教育実践研究の中心に児童研究があり、その基本的な研究の枠組みが長野男子附小への着任以前にできあがっていたことである。上條は、大正期の長野県内で児童研究が推進される中で教員となり、長野師範学校時代の二級先輩である青木と関わる中で児童研究の大切さを実感して研究を行い、雑誌『信濃教育』等に多くの論考を発表した。上條による児童研究は、研究内容の変化に着目すると、「着手した時

期」「研究の枠組みを完成させた時期」「追隨調査をした時期」に区分でき、研究の枠組みを早い段階で構築して追隨調査を行いながらより良いものへと改良しようする中で深められていったことが確認できた。第二は、上條は児童研究の役割を教育の指導原理と捉えていたことである。上條は、「児童を知らずして妥当なる教育はなされない」という教育観を持ち、児童研究により「児童の心理発達の課題」と「学習過程と学習の効果」を明らかにすることで指導をよりよくすることを念頭においていた。研究方法については、児童の精神的産物である言語、綴方、図画、手工品等を研究対象とすること、分析的実験的な方法よりも自然的な観察法を研究方法として用いること、児童の個性の究明を行うことを重視した。こうした考えに基づいて行われた児童研究は、「数概念」「計算能力」の調査、「理科事実及び疑問調査」、「語彙調査」、「道徳性の発達」調査であり、個人差や発達の状況を踏まえたものであった。第三は、長野男子附小で国民学校期に取り組んだ教科研究は、上條が当校への着任以前に行った児童研究を基盤として、青木の指導を踏まえて行われたことである。長野男子附小の教科研究の成果である国民学校叢書は、総合授業は「初等科第一学年の児童の特質」、理科は「児童疑問の調査」、算数は「児童の数理生活の調査」、芸能科音楽科は「児童の音楽生活の実態調査」、国語科は「児童の語彙調査」、修身は「児童の道徳的行為の調査」、健康教育は「保険調査」、綴方は「綴る働の類型調査」というように児童研究を基盤とする取り組みであった。教科研究の基盤となったそれぞれの児童研究と上條が長野男子附小への着任以前に取り組んだ児童研究とを比較すると修身の「児童の道徳的行為の調査」、国語の「児童の語彙の調査」、理科の「児童疑問の調査」が重なっていた。同時に、それぞれの児童研究は、長野男附小着任以前に取り組んだ児童研究の調査方法を継承しつつも、調査目的の明確化と分析方法の深化を確認することができた。

以上を踏まえると、上條の児童研究は、教育実践の指導原理として行われたものであり、長野男子附小が国民学校期に取り組んだ児童の実態に基づく教科実践を可能にしたとまとめることができる。また、できる限り客観的な児童の実態を踏まえて教育実践を展開しようとする姿勢が、戦後初期に科学的な実践研究として評価される所以となったと言える。

先述のように、本稿における考察は、上條の児童研究を中心とした長野男子附小の国民学校期のものである。次なる課題は、本稿の成果の背景にある明治末から大正期における児童研究に基づく教育実践の解明を行い、成立期社会科における学習指導の基盤をより明確にすることである。

註

- 1 石山脩平「新教育と児童の実態調査」（『児童心理』創刊号，1947年）11頁。
- 2 拙稿「1946年度文部省教科書局実験学校における公民教育研究の展開過程—道徳生活指導との関わりに着目して—」（『中等社会科教育研究』第38号，2020年）33-46頁。
- 3 木宮乾峰「実験学校の指定とその研究事項について」（『文部時報』第842号，1947年）1，2頁。
- 4 信州大学教育学部附属長野小学校『研究叢書第二巻 社会科学習指導法の研究 単元の展開に即した資料の研究』（信濃教育会出版部，1952年）5頁。

- 5 長野師範学校男子部附属小学校『社会科指導の研究－指導計画－』（1947年）2頁。
- 6 拙稿「文部省教科書局実験学校における社会科単元指導計画の作成－青木誠四郎の社会科教育論を手がかりに－」（『社会科教育研究』第112号，2011年）38-50頁。
- 7 中村一雄『遍歴の出会い』（信濃教育会出版部，1998年）116頁。
- 8 アメリカの児童研究運動に触れた代表的な研究には，宮本健市郎『アメリカ進歩主義教授理論の形成過程－教育における個性尊重は何を意味してきたか』（東信堂，2005年）がある。
- 9 日本における児童研究の導入に触れた主な研究としては次の論考がある。小山優子「明治・大正期における S.ホールの児童研究の導入－倉橋惣三と高嶋平三郎の活動を中心に－」（『教育学研究紀要 第1部』第44号，1998年）497-501頁，木内陽一「近代日本における『児童研究』の発展（1890-1920）」（『人間教育の探究』第9号，1996年）135-140頁，同「明治末年における『児童研究』の様態に関する一考察－高嶋平三郎と松本孝次郎を中心に－」（『鳴門教育大学研究紀要 教育科学編』第8号，1993年）21-35頁。
- 10 長野県教育史刊行会編『長野県教育史 第4巻 教育課程編1』（長野県教育史刊行会，1979年）256-259頁。
- 11 上條の人物像について紹介した論考には次のものがある。「先輩を偲ぶ一人と事業 上條茂生」（『北安曇教育会八十年の歩み』1965年）101-105頁，伊藤朝雄「上條茂」（田島清編『信州人物誌』信州人物誌刊行会，1969年）140-141頁，伊藤朝雄「上條茂〈才能教育〉」（信濃毎日新聞社編集局『信州の教師像』信濃毎日新聞社，1970年）189-194頁，市川本太郎「上條茂」（『長野師範人物誌』信濃教育会出版部，1986年）492-496頁，駒込幸典「上條茂－英才教育そして学習指導の集大成へ－」（『信州教育を支えた人々』刊行会編『信州教育を支えた人々』信濃教育会出版部，2008年）32-39頁。
- 12 発達・教育心理学者。1894年現在の長野県松本市生まれ。1910年長野県師範学校を卒業し，小学校訓導を経験した後，1916年東京帝国大学文学部哲学科，同大学院へ進学。大学院終了後は，東京農業教育専門学校教授，日本青少年教育研究所研究部長を経て，1946年3月から教科書局調査課長となる。文部省では，『国民学校公民教師用書』の執筆，教育課程改正委員会委員長として CIE との交渉と学習指導要領編纂の中心となる。1949年3月に文部省を辞任し，東京家政大学教授，同大学学長を兼ねる。1956年没。
- 13 当時の長野男子附小の訓導神波利夫は，国民学校叢書について次のように述べている。「国民学校叢書は，現在においても貴重な文献であり実践研究書である。当時，中央においては東京帝国・京都帝国大学・学士院などで文化史的意義ありと認められ，戦後は教育使節団，進駐軍などから，日本では数少ない科学的な教育研究文献として評価された。こうした研究をなし得たのはまったく上條先生のお力である。この研究は教育における重要な課題であり，附属においてなすべき使命と考えられた先生の識見と強い信念からなされたものである。」（神波利夫「教育研究の先達 上條茂先生」（『信濃教育』第1152号，1982）79頁）
- 14 池田源宏「青木誠四郎 戦後教育を築いた発達・教育心理学者」（松本深志高等学校内 深志同窓会編『深志人物史』1996年）236頁。
- 15 稲垣忠彦「上條茂ノート」（『信濃教育』第1152号，1982年）17-26頁。
- 16 中村一雄「上條茂の実践的教育研究」（同『信州近代の教師群像』東京法令出版，1992年）239-248頁。
- 17 天田邦子「国民学校の教育実践構造－長野県師範学校附属国民学校の事例を中心として－」（『上田女子短期大学紀要』第7号，1984年）163-184頁
- 18 主な研究は次の通りである。池田昭「社会科教育における総合の理論」（『中京女子大学紀要』第20号，1986年）125-136頁，清水毅四郎「『合科・総合』教育論の系譜の研究（5）」（『信州大学教育学部紀要』第65号，1989年）97-108頁，木村元「一九三〇-四〇年代初頭日本義務制初等学校の動向と再編の課題－初等教育の変容と中等学校入試改革の動向に着目して－」（『社会学研究』第38号，2000年）211-256頁，久保義三『新版 昭和教育史－天皇制と教育の史的展開－』（東信堂，2006年），米田豊「『國民科地理』における

-
- 『讀圖力』－『郷土の觀察』を中心にして－』（『社会科教育論叢』第47集，2010年）43-52頁，森岡美香「国民学校における『成績考査』からみる芸能活科習字」（『書写書道教育研究』第26号，2011年）11-19頁。
- 19 稲垣忠彦・寺崎昌男・松平信久編『教師のライフコース』（東京大学出版会，1988年）215-216頁。
- 20 上條茂先生遺稿集刊行会『上條茂先生遺稿集』（1956年）340頁，「上條茂先生略年譜」（『信濃教育』第1152号，1982年）27，28頁などを参考。
- 21 上條茂『児童に関する基礎調査』（浅間山房，1950年）1頁。
- 22 上條茂，前掲（註21）2頁。
- 23 小口伊乙「上條君のこと一机を並べて－」（『信濃教育』第1152号，1982年）33頁。
- 24 長野県教育史刊行会編，前掲（註10）256-259頁。
- 25 長野市立後町小学校編『後町教育百年』（1975年）242頁。
- 26 長野市立後町小学校編，前掲（註25）242頁。
- 27 中村一雄は，青木と上條との関係について，次のように述べている。「上條が数少ない科学的教育研究に走ったのは，二年先輩の児童心理学者青木誠四郎（大正三年三月長師卒業，松本市出身）の応用心理学研究などの影響があったのかもしれない。」（中村一雄「上條茂の実践的教育研究－長野県教育史の視点から－」（『信濃教育』第1152号，1982年）101頁）
- 28 長野県師範学校女子部附属小学校『大正14年度 学校日誌』（1925年），信州大学教育学部附属松本小学校『附属松本小学校六十年史』（1969年）115頁。
- 29 児童研究所については，次の論考が詳しい。山崎四郎「我が国心理学者による『児童の相談』の始まりと展開（前編）－児童教養研究所（目黒）を巡って－」（『熊本学園大学論集「総合科学」』第22巻，2017年）83-99頁，同著「我が国心理学者による『児童の相談』の始まりと展開（後編）－久保良英の『児童相談』－」（熊本学園大学社会福祉学部子ども家庭福祉学科「保育者養成実践研究」第1巻第1号，2018年）1-14頁，同著「初期『児童相談』を担った心理学者らの「事と関心」（『熊本学園大学論集「総合科学」』第25巻，2020年）31-44頁。
- 30 上條茂，前掲（註21）1，2頁。
- 31 内川清士「池田小学校における上條茂先生」（『信濃教育』第1152号，1982年）49頁。
- 32 西山千明「上條茂先生を偲ぶ」（『信濃教育』第1152号，1982年）51頁。
- 33 川上茂「初学年児童の研究について」（『信濃教育』第465号，1934）12頁。
- 34 川上茂，前掲（註33）11頁。
- 35 川上茂，前掲（註33）11頁。
- 36 川上茂，前掲（註33）11頁。
- 37 研究学級については，信州大学教育学部附属長野小学校百年史編集委員会編『信州大学教育学部附属長野小学校百年史』（1986年）420-476頁等を参照。
- 38 高池義則「地理的教材と其の取扱」（長野県師範学校男子部附属小学校『初等教育講習会要項』1939年）10-15頁。
- 39 上條茂「児童道徳性と修身教育上の二三の問題」（長野県師範学校男子部附属小学校『初等教育講習会要項』1940年）12頁。
- 40 信濃毎日新聞出版部編『国民学校早わかり』（信濃毎日新聞社，1941年）136頁。
- 41 長野県師範学校男子部附属国民学校「目次」（同『昭和16年1月初等教育講習会要項』1941年）。
- 42 長野県師範学校男子部附属国民学校，前掲（註41）4頁。
- 43 長野県師範学校男子部附属国民学校，前掲（註41）11頁。
- 44 熊谷美登利「序」長野県師範学校附属国民学校教科研究会『国民学校教科の実践的研究』（信濃毎日新聞社出版部，1941年）1，2頁。

-
- 45 上條茂「跋」, 前掲(註44) 570頁。
- 46 長野県師範学校男子部附属国民学校『昭和16年度 学校日誌』(1941年)。
- 47 長野県師範学校男子部附属国民学校『昭和17年度 学校日誌』(1942年)。
- 48 長野県師範学校男子部附属国民学校『昭和18年度 学校日誌』(1943年)。
- 49 長野県師範学校男子部附属国民学校, 前掲(註46)。
- 50 長野県師範学校男子部附属国民学校教科研究会編『青木誠四郎先生講述 学習心理』(1941年) 53-68頁。
- 51 上條茂「跋文」(長野県師範学校男子部附属国民学校教科研究会編『青木誠四郎先生講述 児童研究の意義と方法』1943年) 25頁。
- 52 青木誠四郎「教育研究の課題について」(『信濃教育』第691号, 1944年) 16頁。
- 53 「道徳生活指導の体系」については, 拙稿, 前掲(註2)を参照。

付 記

本研究は, JSPS 科研費(若手研究(B), 19K14234)の助成を受けたものである。

(2021年 9月30日 受付)
(2022年 3月11日 受理)